

天理市文化財調査年報

平成20年度

2010

天理市教育委員会

例　　言

1. 本書は天理市教育委員会が平成20年度に実施した文化財に関する事業の概要をまとめたものである。
2. 本市教育委員会はこれまで市内遺跡の発掘調査概要報告書を、個人住宅建設に伴う調査等とそれ以外の調査の2シリーズに分けて下記のとおり刊行してきた。

個人住宅建設に伴う調査等	それ以外の調査
天理市埋蔵文化財調査概報 森本・藤之庄遺跡(高岸地区)	平成2年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 昭和58・59年度 昭和60年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 乙木・猪知遺跡	平成2年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 昭和60年度 昭和61年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 1990年度	平成3年3月 大垣市埋蔵文化財調査概報 昭和61・62年度 平成元年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 1991年度国庫補助	平成4年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 昭和63・平成元年度 平成4年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成4年度・国庫補助調査	平成5年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 平成2・3年度 平成5年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成5年度・国庫補助調査	平成6年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 平成4・5年度 平成6年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成6年度・国庫補助事業	平成7年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 平成6・7年度 平成10年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成7年度・国庫補助事業	平成8年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 平成8・9年度 平成15年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成8年度・国庫補助調査	平成9年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 平成10・11・12年度 平成17年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成9年度・国庫補助事業	平成10年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 平成13・14年度 半成19年12月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成10年度・国庫補助調査	平成11年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 平成15・16年度 平成20年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成11年度・国庫補助事業	平成12年3月 天理市埋蔵文化財調査概報 平成17年度 平成22年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成12年度・国庫補助事業	平成13年3月 ※続刊は作成中。
天理市埋蔵文化財調査概報 平成13年度・国庫補助事業	平成14年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成14・15年度・国庫補助事業	平成17年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成16年度・国庫補助調査	平成18年3月
天理市文化財調査年報 平成18年度	平成20年3月
天理市文化財調査年報 平成19年度	平成21年3月
天理市文化財調査年報 平成20年度	本書

平成18年度以降の個人住宅建設に伴う調査等(範囲確認調査等を含む)については、上記左のシリーズに後続する『天理市文化財調査年報』(本書)に収録している。それ以外の調査については、上記右のシリーズに後続する『天理市埋蔵文化財調査概報』として従来どおり刊行を続けている。このほか、単冊の調査概報や調査報告(第8集まで刊行済)も必要に応じて刊行する予定である。

3. 本書第2章には、資料・事例報告として、平成20年度に市無形民俗文化財に指定された福住町別所「さる祭り」、及び同年度に資料整理を完了した田部遺跡(平成10年度調査)についての報告を掲載した。
4. 遺物整理作業及び本書作成に至るまで下記の方々のご助力を得た。記して謝意を表す。

小野間智子(奈良教育大学)、今井和代・後藤愛弓(奈良女子大学大学院)、
中尾祥悟・中西宏昌・村下博美(天理大学)、松本吉弘(京都大学大学院)、
伊東由実・岩井真生・河喜多淑子・鈴木貴子・松本真並
5. 本書は天理市教育委員会文化財課 主事 石田大輔が編集した。文責は各担当箇所の末尾に明示した。

(所属は当時のもの)

目 次

例 言

目 次

第1章 平成20年度 事業の概要 1

第2章 事例・資料報告 7

無形民俗文化財 福住町別所「さる祭り」の指定について —— 松本洋明 9

田部遺跡（平成10年度の調査） 石田大輔・松本吉弘 15

図 版

抄 錄

第1章

平成20年度 事業の概要

I. 埋蔵文化財の調査

1. 埋蔵文化財発掘届・通知

平成20年度に本市教育委員会を経由した、文化財保護法第93条にもとづく埋蔵文化財発掘届および同法第94条にもとづく埋蔵文化財発掘通知の件数は以下のとおりである。

第1表 平成20年度 埋蔵文化財発掘届および発掘通知件数

	埋蔵文化財発掘届 (法第93条)	埋蔵文化財発掘通知 (法第94条)		発掘調査	工事立会	慎重工事	その他
平成20年度 (2008年度)	93	21	県教委通知	13	68	32	1

※県教委通知件数には次年度以降に対応するものや県教育委員会が対応するものを含むため、下記の調査件数等とは一致しない。

2. 発掘調査

平成20年度は5件の発掘調査をおこなった。本書に概要報告を掲載する対象となる調査はなかった。これらの調査については、別途概報を刊行する予定である。

第2表 平成20年度 発掘調査一覧

	名 称	住 所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概 要
1	前款遺跡 第7次	高安町218-1	住宅(賃貸)	72m ²	平成20. 7. 24 ~ 8. 6	石田	弥生時代後期：河川
2	高橋遺跡 第2次	高橋町539番外	市営住宅	200m ²	平成20. 8. 13 ~ 9. 5	青木	弥生時代～近世初頭：溝、土坑など
3	袋原古墳 第3次	別所町189-1付近	道路	36m ²	平成20. 12. 16 ~12. 18	青木	古墳時代後期：古墳周縁
4	余里遺跡	田部町157-1, 159-1, 159-2, 159-1	土地区画整理	300m ²	平成21. 2. 16 ~ 3. 13	北口	古墳～平安時代：河川
5	内山永久寺跡	松之内町24-1	ガレットバーナ 建設	98m ²	平成21. 2. 26 ~ 3. 27	石田	中世：寺院造成土 弥生：河川

3. 試掘調査

平成20年度は8件の試掘調査をおこなった。概要是以下のとおりである。

第3表 平成20年度 試掘調査一覧

	名 称	住 所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概 要
a	在原遺跡	櫻木町3563-2他	その他	36m ²	平成20. 8. 4 北口	青木	遺構なし
b	田部遺跡	田部町346他	住宅(分譲)	40m ²	平成20. 9. 5	北口	遺構なし
c	星塚遺跡	二階堂上ノ庄町53-1, 54-1, 56-1, 56-2	老地造成	76m ²	平成20. 11. 4	青木 北口	遺構なし
d	前款遺跡	富士町204-1, 205-1, 205-5	その他建物	20m ²	平成20. 12. 15	青木	古墳時代：遺物包含層
e	平等坊・岩室遺跡	岩室町57-4の一部	その他建物	3 m ²	平成21. 1. 26	石田	遺構なし
f	成願寺遺跡	中山町・成願寺町	その他	4 m ²	平成21. 3. 2	青木	遺構なし
g	前款遺跡	富士町233-1	住宅(分譲)	60m ²	平成21. 3. 9	青木	古墳時代～中世前半：河川
h	中ツ遺跡	高橋町	その他	15m ²	平成21. 3. 27	青木	遺物包含層

II. 史跡整備

史跡赤土山古墳整備事業を実施している。平成20年度は、赤土山古墳後円部東側の家形埴輪祭祀遺構の復元などの施設整備や、園路整備などの整備工事をおこなった。

III. 普及・啓発

1. 埋蔵文化財特別展示

文化財課がおこなっている発掘調査の成果を広く市民に紹介するために、「発掘の現場から—地下に眠る天理の昔々—」と題する埋蔵文化財特別展示を平成18年度より実施している。夏季・冬季の年2回開催で、夏季は時代や分野を特集した企画展、冬季は前年度の調査成果速報展をテーマとする。平成20年度は第5回、第6回を開催した。また、この展示にあわせて、講演会・展示解説を新たに実施した。

平成20年度夏の文化財展（第5回）『豊田山丘陵周辺の遺跡』

〔展示〕

別所ツルベ遺跡第1次調査（平成6年度）で出土した縄文土器や、袋塚古墳第1次調査（昭和60年度）などで出土した埴輪などを中心に、天理市別所町周辺の遺跡を特集した。

展示内容 別所ツルベ遺跡（第1次）、袋塚古墳（第1次）、塚山古墳

期 間 平成20年8月16日（土）～8月30日（土）

会 場 天理市文化センター1階展示ホール

〔講演会・展示解説〕

日 時 平成20年8月23日（土） 14:00～16:00

会 場 天理市かがやきプラザ

内 容 ①「別所ツルベ遺跡の調査」（青木勘時）

②「別所町の古墳」（石田大輔）



『豊田山丘陵周辺の遺跡』

平成20年度冬の文化財展（第6回）『平成19年度発掘調査速報展』

〔展示〕

平成19年度中に天理市教育委員会が実施した発掘調査9件の成果を速報展示した。

展示内容 前栽遺跡（第6次）、別所ツルベ遺跡（第4次）、成願寺遺跡（第15・16次）、

史跡 赤土山古墳（第9次）、中ツ道遺跡、渋谷向山古墳隣接地（2ヶ所）、

向山遺跡（第2次）

期 間 平成20年12月6日（土）～12月24日（水）

会 場 天理市文化センター1階展示ホール

〔講演会・展示解説〕

日 時 平成20年12月13日（土） 14:00～16:00

会 場 天理市かがやきプラザ

内 容 ①「前栽遺跡第6次調査」（石田大輔）

②「成願寺遺跡第15次調査」（北口聰人）

③「史跡 赤土山古墳第9次調査」（石田大輔）



冬の文化財展 講演会

2. その他の普及・啓発活動

平成20年度中におこなったその他の普及・啓発活動のうち、主なものは以下のとおりである。

黒塚桜まつり

柳本商工連盟・同青年部がおこなう「黒塚桜まつり」の際に、文化財に親しむ機会の一つとして、勾玉作りを体験する催しを、平成20年春シーズンと21年春シーズンにおこなった。

日 程 平成20年3月30日（日）

平成21年3月29日（日）

天理っ子遺跡探検隊

主に小学生を対象として市内の遺跡や古墳をめぐるハイキングを、平成17年度より教育委員会生涯学習課と共に催している。クイズやゲームを取り入れて、文化財に関する知識が深まるよう工夫している。本年度は第4回目で、本市柳本町周辺をめぐった。



日 程 平成20年11月15日（土）

行 程 黒塚古墳展示館→中山大塚古墳→西殿塚古墳→長岳寺

→櫛山古墳→天神山古墳→黒塚古墳展示館

遺跡探検隊（櫛山古墳付近にて）

参 加 者 小学生・保護者 計36名

柳本校区はにわ祭り

柳本小学校でおこなわれる「はにわ祭り」の際に、赤土山古墳出土の埴輪レプリカを展示した。

日 程 平成21年2月7日（土）

4. 刊行図書

平成20年度は下記の図書を新たに刊行した。

・天理市埋蔵文化財センターだより Vol. 6 平成20年8月15日

平成20年度夏の文化財展の展示内容にあわせて、本市別所町周辺の遺跡に関する調査成果を紹介した。

・天理市埋蔵文化財センターだより Vol. 7 平成20年12月1日

平成20年度冬の文化財展の展示内容にあわせて、平成19年度中におこなった9件の発掘調査成果を紹介した。

・天理市埋蔵文化財調査概報 平成15・16年度 平成21年3月31日

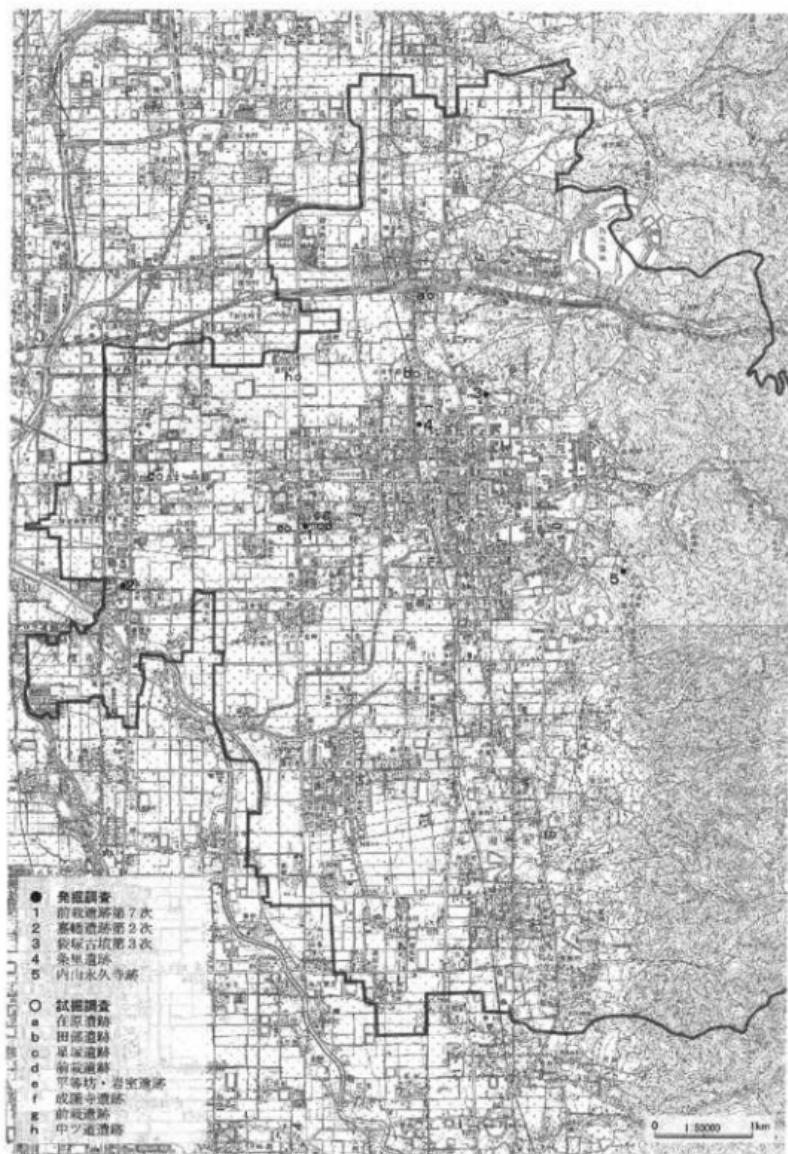
以下の調査概要を掲載した。

【平成15年度】平等坊・岩室遺跡（第23次）、前栽遺跡（第4次）

【平成16年度】長柄宝殿遺跡、薬師山3号墳、平等坊・岩室遺跡（第25次）

・天理市文化財調査年報 平成19年度 平成21年3月31日

平成19年度の事業内容と、史跡 赤土山古墳（第9次）、成願寺遺跡（第15次）の調査概要を掲載した。



第1図 平成20年度 発掘調査・試掘調査地点

第 2 章

事例・資料報告

無形民俗文化財 福住町別所「さる祭り」の指定について

I.はじめに

大和高原が広がる天理市東部の福住町別所は、名阪国道福住インターから北方におよそ1.5kmの山中に所在する（第2図）。ここでは地元の男の子が集まって、山頂の祭祀場へ山の神をおくる祭り通称「さる祭り」が毎年末に行われている。天理市教育委員会は平成20年度に福住町別所「さる祭り」を市の無形民俗文化財に指定した。

II. 福住町別所「さる祭り」の概要

1. 市無形民俗文化財指定に至る経過

平成17年度文化財保護審議会（平成17年7月5日） 福住町別所の「さる祭り」について、地元から保存の要望が上がっていることを紹介する。

平成17年福住町別所「さる祭り」（平成17年12月25日） 文化財保護審議会委員中田太造氏と共に「さる祭り」の現地調査を行う。行程、場所、参加者など様子を実見する。

指定文化財指定申請書の提出（平成18年5月30日） 福住町別所自治会（地縁団体）会長岡本武夫氏から指定文化財指定申請書の提出を受け、天理市文化財保護条例第5条第4項の規定に基づき、天理市教育委員会教育長から天理市文化財保護審議会に、天理市指定文化財の諮問を依頼する。

平成18年度文化財保護審議会（平成18年7月10日） 福住町別所「さる祭り」の諮問がなされ、次のことをまとめ自治会長へ報告する。

- ・本来は男の子主体の行事として伝えられているが、現在は少子化に伴い行事を知る自治会の皆さんでおこなっている。この点は貴重な無形民俗文化財を保護していくために必要な処置と言えるが、次世代に向けて行事が保存できるかどうか、文化財指定後に行事が衰退してしまうことも考えられる。

- ・保存方法として、行事の手順を知る関係者で「さる祭り」の映像記録を作成し、文化財保護審議会に提出したうえで、再度諮問する。

平成19年度 第1回文化財保護審議会（平成19年5月29日） 自治会から提出された映像記録を中心におこなった。

これについて、福住町別所「さる祭り」が農耕儀礼化した山の神信仰の一つで、吉野などの山岳信仰とは異なり、里山に伝わる水田農耕の守り神信仰であることが指摘された。また、申祭りの名は全国的に散見し、申だからといって必ず春日大社の影響によるもとは限らず、申の日に行っているとも限らない。福住町別所の「さる祭り」の申は、春日大社の影響を受ける以前から山の神に仕える猿を意味し、天理市東部の山の神信仰を究明する意味において貴重な文化財である意見が出された。

平成19年度 第2回文化財保護審議会（平成19年10月18日） 福住町別所「さる祭り」の答申書（案）について検討をおこなう。

平成19年度 第3回文化財保護審議会（平成20年2月29日） 福住町別所「さる祭り」の答申書の内容及び保持団体設置の確認をおこなう。

教育委員会に答申書上程 平成20年3月18日付け答申書の提出に伴い、天理市文化財保護条例第



第2図 福住町別所の位置

5条第1項及び第3項の規定に基づき、指定及び保持団体の認定について教育委員会へ上程する。

告 示 平成20年4月4日に開催した教育委員会を経て、平成20年4月9日付けで、無形民俗文化財、指定番号第4号にて、市の指定文化財指定及び保持団体の認定がなされた。

2. 福住町別所「さる祭り」の概要

種類：無形民俗文化財

名称：福住町別所「さる祭り」

所在地：天理市福住町別所

保持団体：福住町別所「さる祭り」保存会

由来 「さる祭り」は、毎年12月23日又は24日に行われる民俗行事で、過去の事例を示す資料は今のところ認められず、いつ頃から行われている行事なのか不明であるが続けられてきた行事である。伝承を確認するため聞き取り及び現地調査などを行った所、水田農耕の守り神として農耕儀礼化した山の神信仰の一種と考えられる。

また「さる祭り」の名称は、奈良春日大社の影響を受けたものだとされるが、一方では山の神の使いと結びついた事例であり、「さる祭り」や山の神信仰を究明する意味において学術的にも貴重な民俗行事である。

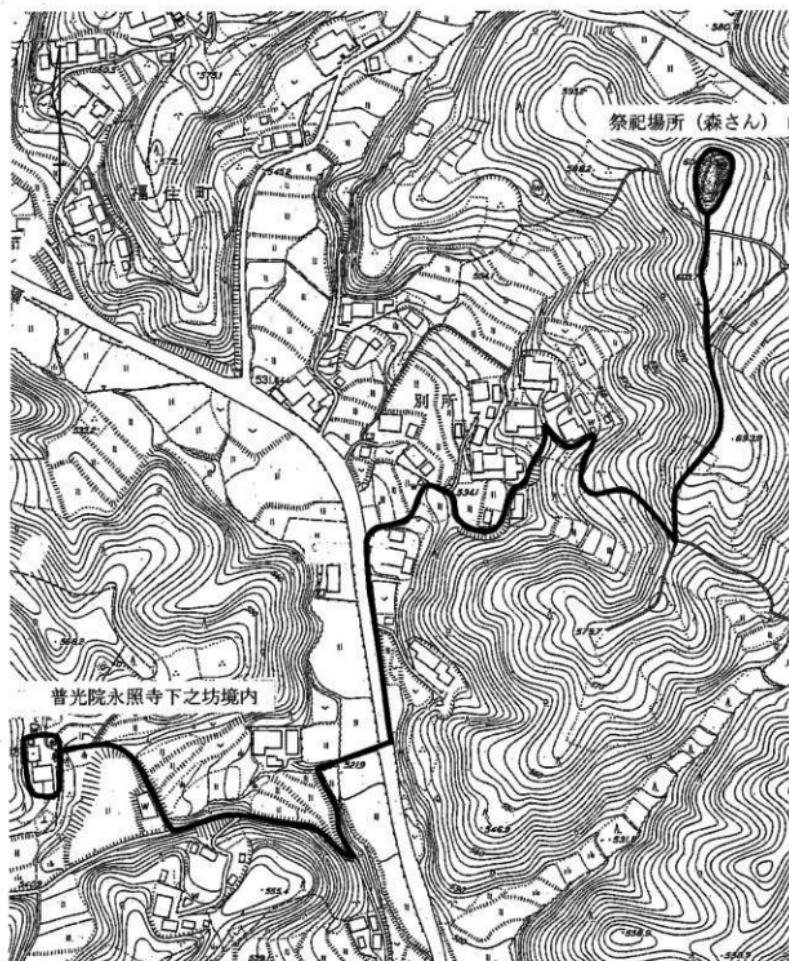
行事の形態 祭りは、0才から15才の男子が中心になって行ない、祭りの前日に藁、米、穀物など行事に用いる材料や食べ物を村から調達する。祭りの当日は、朝から普光院永照寺下之坊境内に集合し、集めた藁でしめ縄と「でんぼ」と呼ぶ藁束を一対、細竹で御幣2本、長さ4mほどの竹棒数本を準備する。準備が完了すると、「でんぼ」、御幣、細竹の棒にしめ縄を掛け、下之坊から村の北側にある小高い山頂の祭祀場へ向かう。この間、「えんざい、まんざい、堂供養、赤坂食いたい腹へった」と呼びながら村中を通り抜け、通称「森さん」と呼ぶ祭祀場まで移動する。祭祀場は、比高73mの山頂にあり、周辺まで植林で覆われ山頂には雑木が残る。山頂では、樹木数本にしめ縄を通しながら一編5mほどの方形の囲みを作り、御幣と「でんぼ」を供えている（以前は社があり、その前に「でんぼ」を供えたとも言う）。何重にもしめ縄を通してから回数を祭祀場にある樹木に刻むが、平成17年12月25日の祭事では、しめ縄を12回巡らし、その回数を樹木に刻んでいる。

祭祀場での祭事が終わると、「天狗さんきらった」と叫んで、子供たちが山頂から走り去りながら下之坊へ戻る。天狗が来たという呼びかけは、山の神がおりてきたことの表現と思われる。

この行事は男子主体で、奈良県東北部に残る山の神信仰も男性主体の行事として伝承されており、子供の祭りとして継承されているが、山の神信仰の風習を残す部分だと言える。

類例 天理市福住町別所に伝わるさる祭りは、行事の内容から推察して三重県北中部から奈良県東北部、滋賀県東南部にかけて展開する山の神信仰の一種「カギヒキ」行事等に類似点が認められる。

福住町別所に伝わるさる祭りの行事は、祭祀場が山頂にあり山の神信仰の特徴が伺え、「カギヒキ」と呼ばれる祭祀は、鉤状に折れ曲がった樹木等を用いてカギ形を作り、樹木やしめ縄などにカギ形を掛けて唱え言をするもので、五穀豊穣を祈願する。福住町別所のさる祭りは「でんぼ」と呼ぶ藁束一対を準備するが、その根本を鉤状に折り曲げるなど「ガギヒキ」行事に使われる道具と類似点がある。



第3図 福住町別所「さる祭り」の行程

また、「カギヒキ」行事の中には、男女を表す股木人形やしめ縄に男女のモチーフを作り、男女のすり合わせを表現するなど、子孫繁栄を意味するが、さる祭りでは「でんば」を雄雌と呼んで一対に見立てている点も注目される。

3. 福住町別所「さる祭り」の行程（第3図）

準備日（祭りの前日）

13時00分	薑、米、穀物等の行事に用いる材料及び食べ物を集める。
当 日	
8時30分	普光山永照寺下之坊境内に集合
8時40分	しめ縄、でんぼ一対、御幣一対、竹棒数本を準備
10時30分	下之坊から出発 道中は「えんざい、まんざい、堂供養、赤飯食べたい腹へった」と唱えながら、祭祀場まで移動
11時00分	祭祀場到着（通称森さん）
11時00分	でんぼ一対、御幣一対を祭祀場に供え、竹棒を隅角に立て、およそ5m四方の祭祀空間をしめ縄で囲む
11時30分	しめ縄で開む回数を樹木に刻む
11時40分	「天狗さんきらった」と叫びながら祭祀場から退散
12時00分	下之坊に到着
12時10分	福住町別所の集会場に集合
12時20分	集会場にて食事をとる
13時00分	食事終了、解散

III.まとめ

天理市福住町別所のさる祭りは、行事の形態から山の神信仰の特徴を残し、1年の終わりに山の神を山へ戻す行事として、村の子供達がそれを担い今日まで伝承されてきた。昭和24年、柳田国男が論文「猿の祭」で春日信仰とは異質な要素を持つ「申祭り」の存在を指摘して以来、民俗学では「さる祭り」と山の神信仰や農耕儀礼との関係が注目されてきた。ただし、事例が少なく、その点で本行事は学術的にも貴重な行事と言える。また、福住町別所のさる祭りは、昔の農村の生業に係る習俗や子供行事のしきたり等を知るうえで全くことの出来ないもので、現在は少子化の影響から伝承存続が危ぶまれる状況にある。早急に伝承者の育成が必要であり、市の無形民俗文化財指定によって、伝統行事の保存存続を図るべきものである。

(松本洋明)



写真1 左 御幣一対 右 でんぼ一対



写真2 しめ縄



写真3 竹棒としめ縄



写真4 でんば作り



写真5 しめ縄作り



写真6 下之坊を出発



写真7 祭祀場



写真8 祭祀場に供えたしめ縄



写真9 祭祀場に供えたでんば・御幣・竹棒



写真10 下之坊に集合する保持団体の方々

田部遺跡（平成10年度の調査）

I. はじめに

この調査は、天理市田部町に所在する天理市立祝術公館改築工事に伴い平成10年度に実施したものである。調査は平成11年3月23日に開始し、4月7日にすべての作業を終了した。総調査面積は108m²であった。出土遺物はこれまで公表されていなかったが、このたび整理作業を完了したため、調査成果の公表を兼ねて資料報告をおこなう。

なお、調査成果に関する記述については、調査担当者である泉武〔天理市教育委員会社会教育課文化財係（当時）〕の所見と調査図面をもとに簡潔にまとめるに留めた。

II. 位置と環境

周辺の遺跡 現在の天理市域北部には古代寺院が密に分布していることが知られている（森下1999）。

本光明寺 棟本町所在。明治年間に廃絶した寺院で、採集瓦には奈良～平安時代のものがみられるというが、創建年代など不明な点が多い（天理市史編さん委1976）。

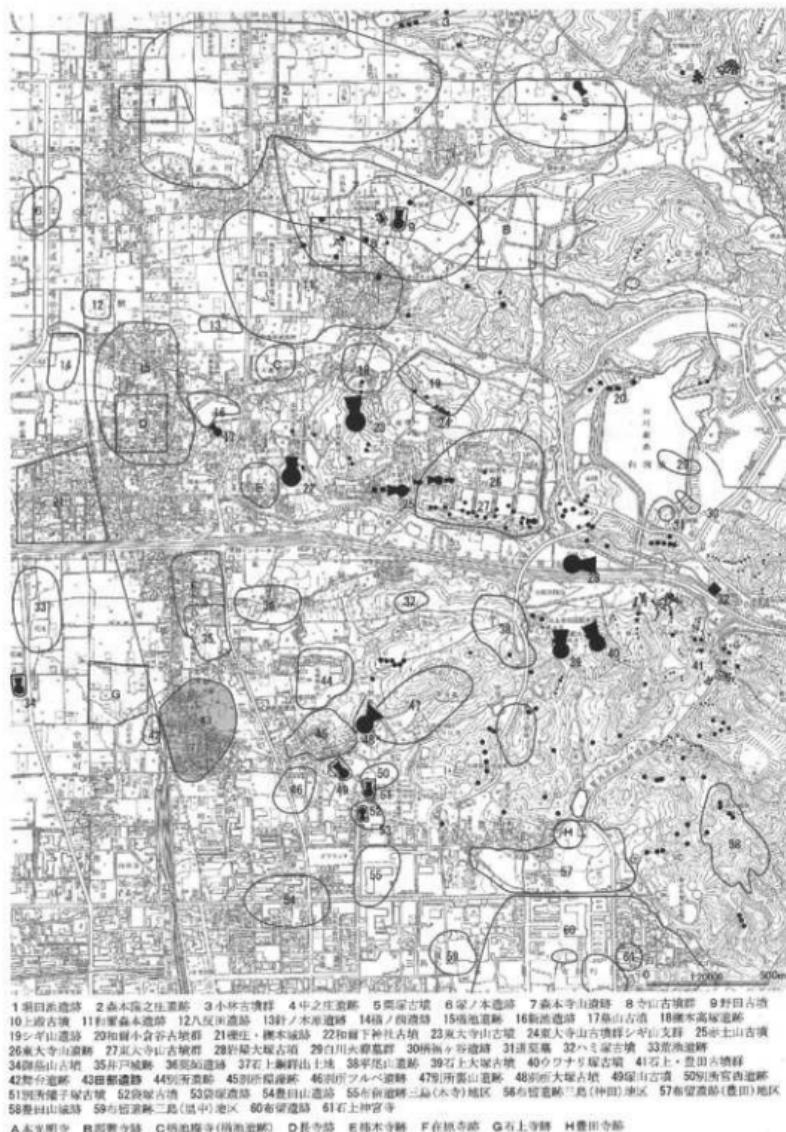
願興寺跡（和爾廬寺） 和爾町所在。和爾氏の同族小野氏の私寺とされている。平成9年度に奈良県立橿原考古学研究所がおこなった調査では、四周を瓦葺きの築地塀で取り囲んだ自然石積みの塔基壇が出土した。金堂や講堂などを含めた全体の伽藍配置は明らかになっていないものの、創建年代が7世紀前半に遡る可能性が指摘されている。また、平成18年度に天理市教育委員会がおこなった調査では、小規模な掘立柱建物跡が確認された。この建物の時期も7世紀頃とみられている。

猪池廬寺 猪町所在。猪池改修工事の際に、多数の古瓦片や塔心磚が出土したと伝えられる。出土遺物の中には奈良市所在の山村廬寺式軒丸瓦があり、瓦当文様が簡略化されていることが指摘されている（近江1962）。

長寺跡 棟本町所在。現在の高良神社付近が伽藍の中心と推定され、周辺で奈良市所在の山村廬寺式軒丸瓦が採集されている（近江1961）。昭和54年度に奈良県立橿原考古学研究所がおこなった調査では、僧坊と推定される掘立柱建物が検出された（長寺遺跡第1次調査）。その後の調査でも包含層からの瓦の出土例が多い（長寺遺跡第2次調査・第3次調査など）。さらに、平成8年度に天理市教育委員会がおこなった調査では、寺域北限の区画溝などの遺構が検出され、周縁に锯齒文をもつ八葉単弁蓮華文軒丸瓦が出土している（長寺遺跡第14次調査）。

柿本寺（橿本廬寺） 楢本町所在。和爾下神社の境内に位置し、礎石の一部が残る。八葉短弁軒丸瓦のほか東大寺式の軒平瓦が採集されており、奈良時代後期の創建と考えられている（天理市史編さん委1976）。平成10年度に天理市教育委員会がおこなった調査では寺院関連遺構は削平されて残っていないかったが、隣接する丘陵斜面には遺構が保存されている可能性が指摘されている。なお、平成11年の台風災害の際にも多量の瓦が採集された。

在原寺跡 楢本町所在。8世紀には存在していたことが文献により分かっているが詳細は不明である（天理市史編さん委1976）。在原寺跡を含む在原遺跡内では天理市教育委員会が5次にわたって調査を行っているが、寺院に関連する遺構は見つかっていない。



第4図 田部遺跡周辺の道路

石上廃寺 石上町所在。建物基壇の名残ともみられる方形土壇が遺存していたと伝えられる。川原寺式や山田寺式といった白鳳時代の軒丸瓦が採集されているほか、素弁蓮華文軒丸瓦破片も見つかっており、創建が飛鳥時代に遡る可能性もある(近江1961)。

豊田廃寺 豊田町所在。素弁蓮華文軒丸瓦が採取されており、飛鳥時代に創建された可能性があるが、現地形からみる限り小規模な寺であったらしい。短期間で廃絶した可能性が指摘されている(森下1999)。

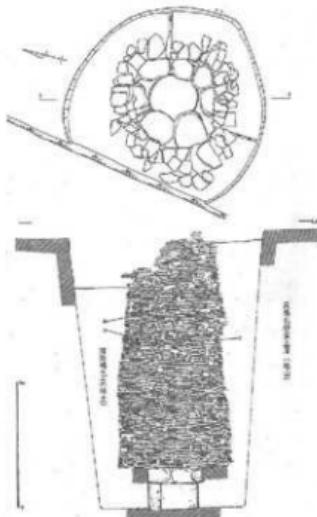
田部遺跡 田部遺跡はJR桜井線と国道16号線の間に広がる遺跡で、現在の上街道沿いに展開する(第5図)。調査事例が乏しいが、これまでにも遺跡内に須恵器片や土師器片の散布が認められ、古墳時代から室町時代までの時期幅が想定されていた。

田部遺跡内では昭和53年度に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をおこなっており、現時点までこれが唯一の調査事例である。この調査では、耕作土直下で径1.6m、深さ2.3mの瓦積み井戸を検出している(第6図)。井戸は掘方の中央部に曲物と石組を据え、その上部に瓦のみを用いて井戸を構築したもので、使用された瓦のなかには軒丸瓦・軒平瓦も含まれていた。井戸自体は中世のものであったが、井戸に使用された2000点近くの瓦は白鳳から平安時代に比定されるもので、井戸構築時にこれらの瓦をどこから入手したかが検討課題とされた。調査者は、出土した軒丸瓦が石上廃寺出土軒丸瓦と酷似すること、平瓦に認められる技法が檜池廃寺表採平瓦と共通することを指摘している(奥川1979)。しかし、この井戸のほかには遺構等は検出されておらず、田部遺跡に関して判明した情報はきわめて限定的であった。

(石田大輔)



第5図 田部遺跡



第6図 橿原考古学研究所昭和53年度調査
検出された瓦積み井戸(奥川1979)

III. 調査の概要

1. 編序

南側に下がる緩斜面に東西12m、南北9m、面積108m²の調査区を設定した。整地土と旧表土を取り除くと直ちに黄灰色の地山土が現れ、土坑や溝を検出した。検出面としては旧表土面からは非常に浅い位置にある。遺構と遺構内の埋土が明瞭に異なり、遺構の検出は容易である。

2. 主要な遺構（第7図・第8図）

検出した遺構は、溝2、土坑96、井戸2である。土坑のうち明らかに掘立柱建物の掘方と推定される土坑は21ある。掘方が小規模で土坑底に石の礎板を置くタイプと、一辺が80cm程度ある大型の方形土坑の2タイプに分類される。

溝 1 調査区の西南で検出した。幅が約60cmで南北方向に延びている。深さは約23cmで、内部からは土器器皿、土釜、甕などの破片がまとまって出土した。

溝 2 調査区東側にあり、南北方向に延びている。各所で土坑に切られており、深さが浅い。検出した遺構群の中では古い時期のものと推定される。

このほか、溝2の西側で南北方向に延びる溝を検出したが、これは公民館建築時の基礎である。

井戸 1 井戸は2基とも調査区南端で検出したため、井戸底まで調査することができなかつた。井戸1は上面の形態が隅丸の方形を呈し、一辺約1.4mである。調査では深さ1.2mまで掘削した。井戸1からは土釜などの破片が出土したほか、平瓦片も出土した。

井戸 2 井戸1に隣接して東側に築かれている。直径約1mをはかる円形の井戸である。調査では深さ約1mまで掘削した。

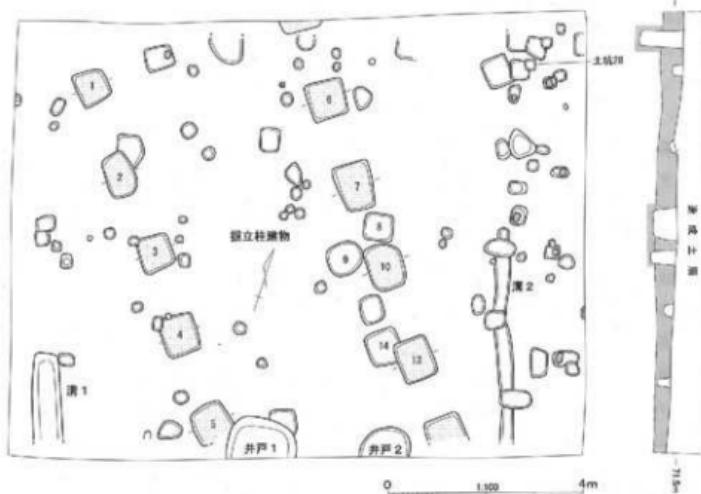
掘立柱建物 1 調査区のほぼ中央で検出した。一边が60~100cmの方形または長方形の土坑を合計12検出した。各土坑は西列と東列で中心が直線上に並び、さらに東西方向でも等間隔で並ぶところから掘立柱建物の柱掘方と推定される。西側では4間、東側では5間分ある。桁行の中心々は1.8m、梁間は4.5mでちょうど2間半の建物が推定される。東西方向については東側には広がらず、西側は調査区外となるため不明である。南北の桁行方向は5間以上の南北方向に長い建物であると推定される。各掘方は現状で深さ30~50cmと深く、壁は垂直に掘られている。堀方内の柱痕跡は1ヶ所を除いて検出することができなかつた。柱痕跡は直徑30cm程度である。建物の主軸方向は南北方向より西に約37度偏している。柱掘方や梁間の規模から相当大規模な掘立柱建物と考えられる。

小規模土坑群 小規模な土坑のうちいくつかは柱掘方で、底部に石製の礎板を持つものが10ある。掘方は30~40cmほどの大きさであり、建物は小規模であったと考えられる。ただし、調査区内で建物としてまとまったものは確認できない。また、方形の小土坑のうちの1ヶ所から土師質皿が折り重なるようにして出土した（土坑28）。このほか、土坑12、土坑29からもまとまった量の土師質皿が出土した。

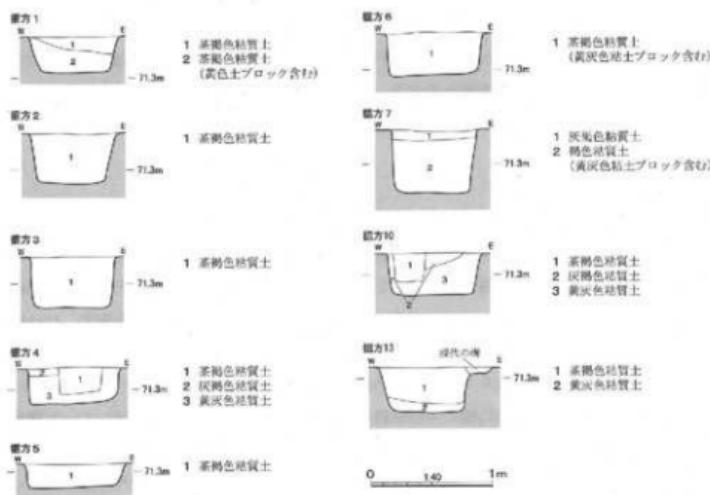


写真11 土坑28出土状況

（石田大輔）〔註1〕



第7図 調査区平面図・土層図



第8図 掘方土層図

IV. 出土遺物

出土遺物は土師質皿、土師質土釜、須恵器、瓦など遺物コンテナ10箱程度である。

1. 中世の遺物

全体として小破片が多いが、溝1・土坑12・上坑28・土坑29・井戸1から中世の遺物がまとまって出土している。

土師質皿 (第9図1~35) 土師質皿は溝、土坑などから出土しているが、その中でも土坑28から18点とまとめて出土している。土師質皿は色調が橙色のものが主体である。口径が7~8cm前後のものと口径が10cm前後のものに大別でき、前者は底部のユビオサエが頗るなものが多く、上げ底の形状を呈する。ただし5、8、11、12は底部のユビオサエは緩やかなものとなっている。口縁部は全てヨコナデが施されており、斜め上にまっすぐ開く口縁を持つものと、外反するものがある。また、口縁と底部の境が屈曲するものがある。5は底部、12は底部縁付近にそれぞれ穿孔が施されている。

後者は底部が平らなものが多いが、14、15、23は底部にユビオサエを施し、上げ底の形状を呈する。後者も口縁はいずれも斜め上にまっすぐ開くか、外反している。口縁と底部の境が屈曲しているものもある。口縁部は全てヨコナデが施されている。

土師質土釜 (第9図36~42) 土師質羽釜はいずれも白色系の胎土を用いており、形態から大きく3つに分類することができる。まず、36~39は口縁部が内湾し、口縁端部を外側に折り曲げ丸く作っている。うち、36~38は脣部内面にユビオサエを施している。36~39は肩部下に突帯を巡らせているが、36~38の突帯が断面三角形で幅狭の形状であるのに対し39は断面方形で幅広の形状になっている。40は口縁部が強く外反し、頸部から外へ水平に開く形状をしている。口縁部が厚く、突帯は持たない。41、42は口頸部断面が「く」の字形に外反しており、口縁端部を内に折り曲げている。2点とも口径より脣部径の方が大きく、41は断面方形で幅狭の突帯、42は断面隅丸方形で幅広の突帯をそれぞれ巡らせている。41は内面からユビオサエによる押圧で器壁を薄く仕上げているが42は比較的厚手である。

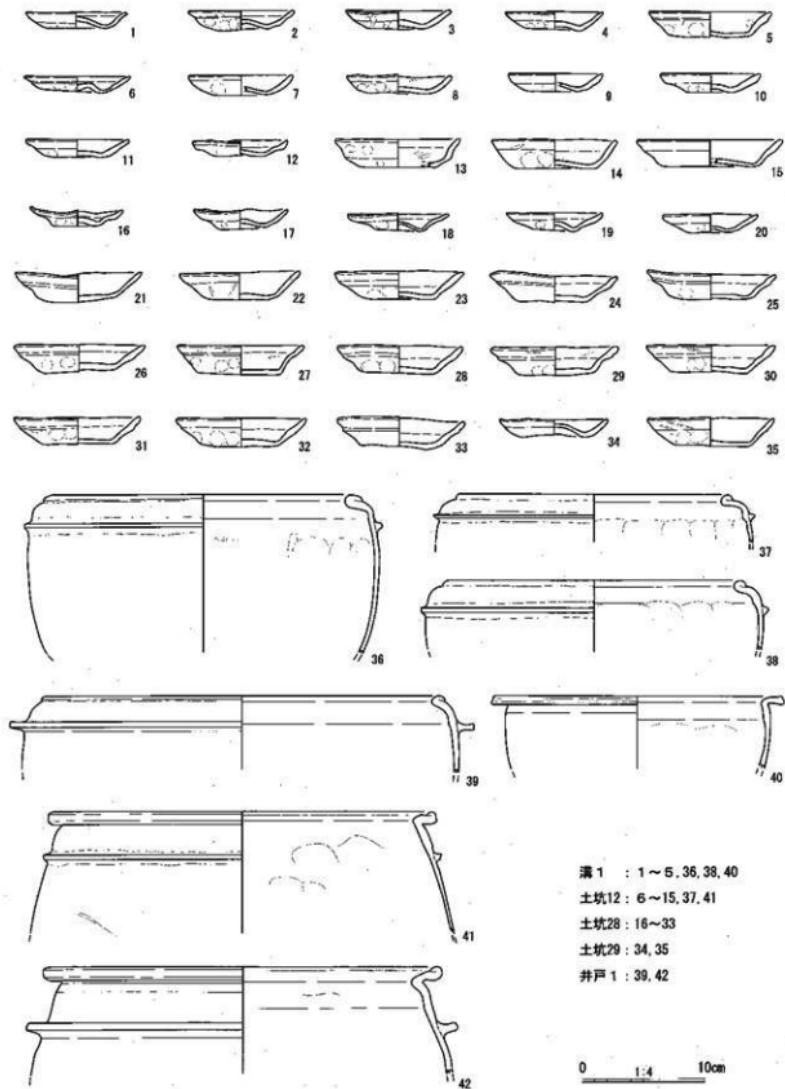
井戸1より出土した39のみ若干古相を示すが、これらの遺物の所属年代はおおよそ14世紀~15世紀と考えられる。

2. 古代の遺物

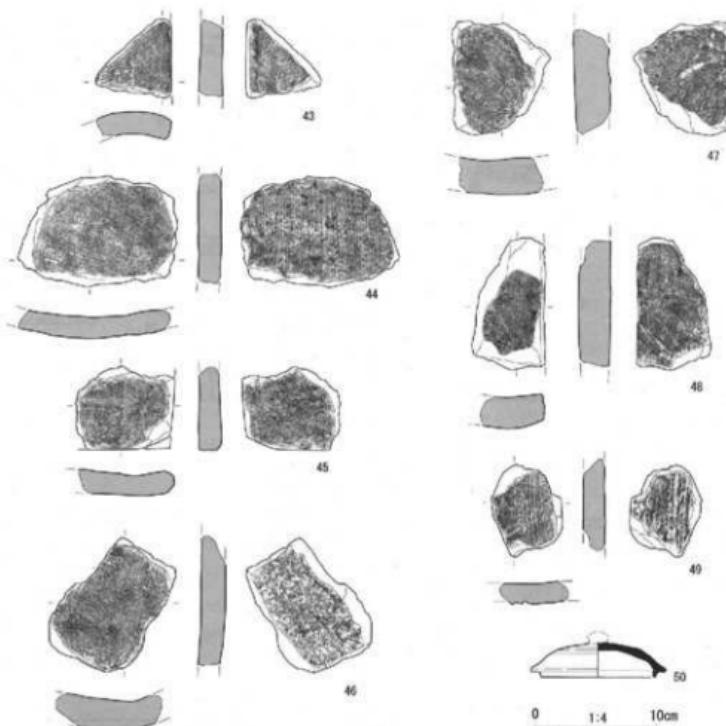
井戸1から瓦片が出土したほか、掘立柱建物1の遺構面精査時に須恵器蓋が出土している。

瓦 (第10図43~49) 平瓦・丸瓦の破片のみで軒瓦は確認できない。43は側縁の残る破片で曲率からみて丸瓦の破片と考えられる。側縁は分割破面をナデ消している。凸面はヨコナデ調整で、側縁の凸面側をわずかに面取りしている。44は平瓦破片である。凸面はやや粗い繩タタキを施す。45は狭端面もしくは広端面と側縁が残る平瓦破片である。凹面に桶の側板痕跡があり、桶巻作り平瓦とみられる。側縁の凸面側をヘラケズリで面取りしている。凸面は横方向にヘラケズリするようである。46は平瓦破片で端面は残っていない。凹面に桶の側板痕跡のような凹凸がある。凸面は摩滅していて調整不明である。47は平瓦破片で端部は残っていない。48は側縁の残る平瓦破片である。側縁には分割破面と分割截面が残り、凹面側から切り込みを入れ分割したことが分かる。49は平瓦破片で端面は残っていない。凸面は粗い繩タタキを施す。

これらの瓦は小片で時期決定の決め手を欠くが、桶の側板痕跡を残すもの(45・46)があること、



第9図 出土遺物実測図1



第10図 出土遺物実測図 2

分割破面・分割截面を残すものがあること(48)から、おおむね8世紀代に比定しうるものと思われる。

須恵器(第10図50) 50は須恵器蓋である。口縁部に小さなかえりがつき、つまみは失われている。頂部外面は回転ヘラケズリを施す。7世紀前半のものと考えられる。

(石田大輔・松本吉弘)

V.まとめ

掘立柱建物1 調査区の中央部で検出した掘立柱建物1は、南北5間以上の規模を有する。小面積の調査であることから建物の大きさを確定することはできないが、それぞれの柱掘方が非常に大きいことから、大規模な建物が想定される。堀方内から出土した遺物はわずかであるが、井戸1から出土した瓦からみて、建物の年代が奈良時代後期に遡る可能性があると調査者は指摘している。

ここで調査地周辺の小字名をみてみると、調査地付近は小字「浄土院」とある。同名の寺院が調査

地の西側の上街道筋に面して現在も所在している。浄土院はかつて東方に広大な寺地を占めていたともいわれる（天理市史編さん委1976）。付近には「大門」という地名もみられることから、古くは寺域がかなり東まで広がっていたことが窺える。そして、現在の浄土院付近には「堀切り」の地名が残る。現状の微地形を観察すると、調査地付近は微高地で、南側に浅い谷状の地形を形成している。微高地は調査地西側の浄土院所在地の方向へ緩やかに下降しつつ延びている。また、調査地東側は比較的に平坦な様相を示している。

このように、調査地付近に「浄土院」という小字名が存在すること、調査地が微高地上にあることから、検出した掘立柱建物も寺院に関連する何らかの建物である可能性を無視できない。このように仮定する場合、調査地が平坦地の西端に位置することから、調査地の東側を中心に遺構が良好に遺存している可能性がある。旧祝徳幼稚園舎（現 天理市埋蔵文化財センター）とその前庭付近が候補となろう。また、掘立柱建物が寺院であるとすると、既に述べたように田部遺跡近辺は古代寺院が密に分布する地域であり、それらとの関連が注意される。しかしながら、時期を示す遺物の出土が少ないとおり、この想定の当否は今後の調査の進展を待って判断するほかない。

中世の遺構 掘立柱建物の西側で検出した小規模な土坑群は15世紀前後のものとみられる。建物配置は明確ではなかったが、同時期の井戸が存在することをあわせて考えると、この付近に中世集落の存在が想定される。なお、今回の調査地北側には「古城」「古屋敷」といった城館の存在を示す字が残されていることにも注意が必要である（村田1980）。一説には字古城を井戸氏の居館跡とする見方もある（天理市史編さん委1976）。

田部遺跡については調査事例が少ないため極めて断片的な情報しか得られていないが、現在田部遺跡の南側一帯で土地区画整理事業が進行しており、それに伴う発掘調査も実施されつつある。今後の調査により田部遺跡の実態解明が進むことが期待されるが、それに加えて今回の資料報告が遺跡の検討に資するものとなれば幸いである。

（石田大輔）

[註]

- 1 調査成果を記述する際は奈良県教育委員会に提出された発掘調査終了報告をもとに構成した。

[挿図出典]

第6図 関川1979 p.246 図3

第11図 天理市史編さん委1977



第11図 調査地周辺の小字名

[主要参考文献]

- 天理市史編さん委員会(編)1976『改訂天理市史』上巻 天理市
 天理市史編さん委員会(編)1977『古墳墓一覧』『改訂天理市史』史料編別冊
 堀池春峰1961「山辺の道の古代寺院と氏族」『南都仏教』10
 近江昌司1962「大和椿池庵寺の遺跡と遺物」『大和文化研究』第7巻第8号
 近江昌司1961「大和国石上寺址及び長寺址出土の遺物」『大和文化研究』第6巻第6号
 關川尚功1979「田部遺跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査報』1978年度 奈良県教育委員会
 村田修三1980「井戸城」『日本城郭大系』第10巻 新人物往来社
 森下 衡1999「山辺の道と古代寺院」『古代を考える 山辺の道』吉川弘文館

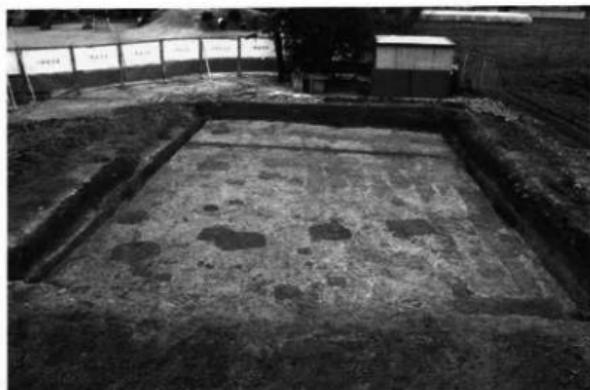
第4表 遺物計測表

番号	器種	色調	釉土	焼成	口径・底径	器高	残存率	出土地点	備考
1	土師質皿	7.STR 7/6 横	青	良好	8.0	1.3	完形	横1	
2	土師質皿	STR 5/6 明赤褐	青	良好	8.6	1.6	完形	横1	
3	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	8.3	1.6	ほぼ完形	横1	
4	土師質皿	STR 5/4 にぶい赤褐	青	良好	7.8	1.4	完形	横1	
5	土師質皿	7.STR 5/4 にぶい横	青	良好	9.7	2.1	1/2	横1	
6	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	8.6	1.3	1/2	土坑12	
7	土師質皿	STR 5/6 明赤褐	やや密	良好	8.4	1.6	1/2	土坑12	
8	土師質皿	STR 6/6 明赤褐	青	良好	8.4	1.5	完形	土坑12	
9	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	7.5	1.5	2/6	土坑12	
10	土師質皿	7.5 STR 6/6 横	青	良好	7.8	1.5	1/2	土坑12	
11	土師質皿	7.STR 7/6 横	青	良好	8.2	1.5	1/2	土坑12	
12	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	7.6	1.4	1/3	土坑12	
13	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	10.0	2.3	1/4	土坑12	
14	土師質皿	STR 7/4 にぶい横	青	良好	10.2	2.3	1/2	土坑12	
15	土師質皿	10YR 6/6 明黄褐	青	良好	11.6	2.2	1/3	土坑12	
16	土師質皿	STR 7/8 横	青	良好	7.8	1.6	完形	土坑28	
17	土師質皿	STR 7/6 横	やや密	良好	7.6	1.5	ほぼ完形	土坑28	
18	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	8.1	1.4	7/8	土坑28	
19	土師質皿	7.STR 6/6 黄褐	青	良好	7.7	1.5	3/4	土坑28	
20	土師質皿	2.STR 6/6 横	青	良好	7.6	1.5	7/8	土坑28	
21	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	10.3	2.6	ほぼ完形	土坑28	
22	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	9.8	2.2	完形	土坑28	
23	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	10.2	2.3	完形	土坑28	
24	土師質皿	STR 7/6 横	青	良好	10.2	2.5	完形	土坑28	
25	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	10.2	2.6	完形	土坑28	
26	土師質皿	2.STR 7/8 横	青	良好	10.6	2.3	完形	土坑28	
27	土師質皿	STR 7/8 横	青	良好	10.2	2.4	完形	土坑28	
28	土師質皿	STR 7/8 横	青	良好	10.0	2.2	完形	土坑28	
29	土師質皿	STR 7/8 横	青	良好	10.2	2.2	完形	土坑28	
30	土師質皿	7.STR 8/6 浅黄褐	青	良好	10.2	2.1	完形	土坑28	
31	土師質皿	STR 7/8 横	青	良好	10.2	2.2	完形	土坑28	
32	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	10.4	2.4	ほぼ完形	土坑28	
33	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	10.2	2.4	完形	土坑28	
34	土師質皿	STR 6/6 明赤褐	青	良好	8.8	1.5	1/4	土坑29	
35	土師質皿	STR 6/6 横	青	良好	10.2	2.3	ほぼ完形	土坑29	
36	土師質羽釜	2.SY 8/3 浅黄	青	良好	24.6	(13.0)	口絶 1/4	横1	
37	土師質羽釜	SY 8/4 浅黄	青	良好	22.0	(3.9)	口絶 1/2	土坑12	
38	土師質羽釜	2.SY 8/4 浅黄	青	良好	24.0	(6.7)	口絶 1/4	横1	
39	土師質羽釜	2.SY 8/3 浅黄	やや密	良好	32.2	(6.4)	口絶 1/12	井戸1	外側に縫付着
40	土師質羽釜	10YR 8/3 浅黄 横	青	良好	23.4	(6.0)	口絶 1/12	横1	
41	土師質羽釜	10YR 8/4 浅黄 横	青	良好	31.0	(9.9)	口絶 1/4	土坑12	
42	土師質羽釜	2.SY 8/2 灰白	やや密	良好	32.0	(18.0)	口絶 1/8	井戸1	
43	瓦	2.SY 7/2 灰黄	青	良好	-	-	破片	井戸1	
44	瓦	2.SY 7/2 灰黄	やや粗	良好	-	-	破片	井戸1	
45	瓦	2.SY 6/1 黄灰	やや密	良好	-	-	破片	井戸1	
46	瓦	10YR 1/1 極灰	やや密	やや良	-	-	破片	井戸1	
47	瓦	N5/0 灰	やや粗	良好	-	-	破片	井戸1	
48	瓦	2.SY 8/1 灰白	やや密	やや	-	-	破片	井戸1	
49	瓦	SY 7/1 灰白	やや密	良好	-	-	破片	井戸1	
50	瓦	N 5/0 灰	青	良好	9.2	(2.9)	ほぼ完形	直壁面附着	

図 版

図版1 資料報告 田部遺跡の調査（平成10年度）

①



図版2
資料報告 田部遺跡の調査
(平成10年度)

②



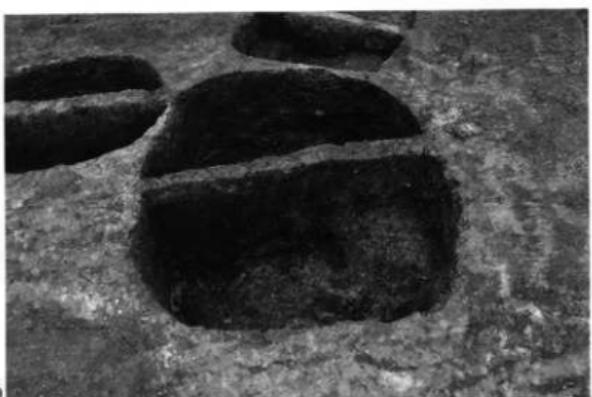
調査区全景(西から)



調査区全景(北から)



調査区全景(東から)



掘立柱建物 挖方10

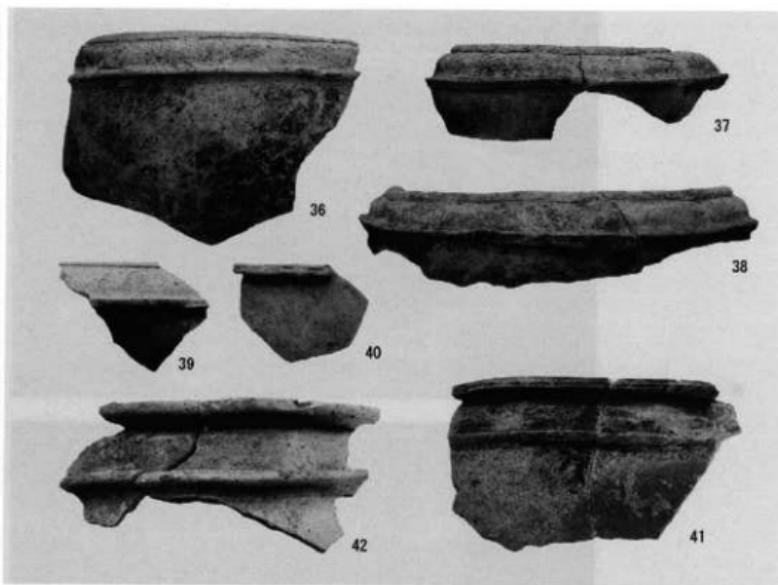


井戸 1

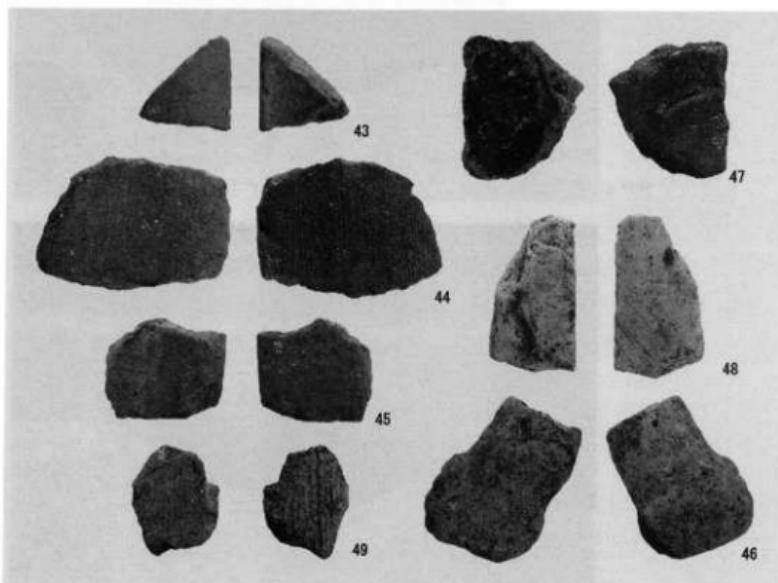


井戸 2

④



上師質土瓦



瓦

報告書抄録

ふりがな	てんりしほんかがいちょうきねんぼう へいせいじじゅうねんと						
書名	天理市文化財調査年報 平成20年度						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	石田大輔（編集）・松本洋明・松本吉弘						
編集機関	天理市教育委員会						
所在地	〒632-8556 天理市川原城町605						
発行年月日	平成22（2010）年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村					
田部遺跡	天理市田部町 320番地	292044	B-D-338 市1	34° 36' 43" 座2	135° 49' 53" 座2	19990323～ 19990407	108m ² 公民館建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田部遺跡	集落跡	奈良・中世	掘立柱建築跡 井戸	須恵器・土師器・瓦	平成10年度調査の資料報告（平成20年度に遺物整理完了）

※1 遺跡番号は奈良県遺跡地図収録の番号を掲載した。

※2 緯度表示は世界測地系（平成14年4月1日より通用）による。

平成22（2010）年3月31日

天理市文化財調査年報 平成20年度

発行 天理市教育委員会
編集 天理市川原城町605番地

印刷 (株)天啓
天理市森本町810番地